
Bringer

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bringer

【Nコード】

N3060I

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

俺が置き傘を持って来るのを忘れたことは一度もない。置き傘をお題にしたショートショート。

置き傘を持って来るのを忘れたことは一度もない。

高校のクラスメイトの男子には「小林、お前って本当にマメだよな」とか言われるけど、それは大きな間違いだ。

俺は本当は忘れっぽい性格なのだ、むしろ。

「はあ……」

朝の教室。

今日も持つて来た折り畳み傘を見つめ、溜め息を吐く。

「よっ、おはよ、小林」

背中を叩かれて振り向くと、肩からスポーツバッグを下げたクラスメイトの荻原千夏さんが立っていた。

「あ、ああ、おはよう荻原さん」

何かと肌寒い梅雨の時期だというのに、一人夏服が眩しい。涼しげな首元やら、健康的な二の腕やら、短いスカートから覗く太ももに思わず目が行く。

ただでさえ万人が振り返るような容貌をしてるにも関わらず、そんな出で立ちであるから、不可抗力ってやつだ。仕方ないじゃん！けれども、荻原さんにはちっとも自覚がないようで、ジト目で睨まれた後、

「……目がエロい」

「そ、そんなことあるわけはあッ!？」

容赦なく殴られた。

椅子ごと仰向けに転倒する。

「全く、外は寒いし、小林の目はエロいし、気分悪いわ!」

俺の左隣、窓際の席にドカッと腰掛ける荻原さん。

とりあえず、長袖を着て下さい。

荻原さんの視線の先、何気なく見た窓の外は、灰色の曇り空だった。

雨の野郎、放課後を狙っていたかのように、どっと降って来やがった。

私は傘なんか持って来てないってのに。

おかげで陸上部は休みになってしまったし、やることもない。

仕方なく私は、高校の二年生玄関で雨宿りをしながら、一向に退きそうもない雨雲を見つめている。

「あれ、荻原さん？」

胸の内をくすぐられたような感じがして身震い。

下駄箱の方を見やると、同じクラスの小林が立っていた。

ルックス普通、成績中の上、運動神経普通、特徴工口い。時々無性にムカつくヤツ。

「……小林、何か用？」

背後から奇襲された気がして、声に棘を生やす。

「ああ、いや、玄関に立ってどうしたのかなって……」

「見て分からない？ 傘を忘れたのよ」

「傘を？」

私の横に並んだ小林は、空を見上げて、

「う、うわー、凄いだしや降りだー。こりゃー、止みそうにないね」

「アクセントゼロの棒読み。」

「……」

「……え、え」と

小林は折り畳み傘で、ポンポンと自らの肩を叩く。

「……相合傘なんて死んでもやらないわよ」

「め、滅相もない！」

両手を振った小林は、私に折り畳み傘を持たせる。

「よ、良かったら使ってよ。俺、まだ余分に折り畳み傘持ってるか」

らさー！ 何なら貰っちゃってもいいし！」

「ちよつと待て。何で私があんたの」

「じゃあ俺、教室に折り畳み傘取りに行つて来るから！ また明日

！」

「あつ、コラ！」

小林は靴を脱いで、さつさと昇降口の方へ消えて行つてしまふ。

押し付けられた折り畳み傘を見る。

青い無地の、地味な折り畳み傘。

「何で私があんたの……折り畳み傘なんか差さなきゃなんないのよ

……」

仰ぎ見た灰色の雨雲は厚く、今日はもう陽の光を拝めそうにない。

すっごいムカつく。

折り畳み傘を開いて、雨の中を歩き出す。

足を止めて、振り返つた。

「意気地無し」

別に深い意味なんか、ない。

翌朝の天気予報では、本日は終始晴れが続くとのことだった。

さすがに折り畳み傘を持って行く必要はないだろう。

家の外に出れば、全天に澄んだ青が広がっている。雲一つない。

俺は軽快な足取りで学校に向かった。

教室に着くとまだ誰もいなくて、時計を見れば、いつもより大分

早かった。

「んー！」

席について、大きく伸びをする。

それにしても、昨日は荻原さんに上手く傘を渡せて良かった。

これで少しは

「小林」

呼ばれて振り向くと、荻原さんが教室に入ってきて来るところだった。

「あっ、荻原さん、おはよう」

「……おはよ」

何故か目を反らす荻原さん。つかつかと窓際の席まで移動し、大きな音を立てて椅子に腰掛ける。机に肩肘を着き、視線は窓の外へ。横目でそれを眺めていると、

「これッ！」

怒鳴り声混じりに折り畳み傘を突き付けられた。

「お、荻原さん？」

「昨日の傘！ 返す！」

「え……」

「な、何よ、変な顔しないでよ！ 私だって借りた物ぐらいちゃんと返すわよ！」

荻原さんは咳払いをし、

「と、とりあえず、昨日はその、一応、た、たす……」
気のせいかな荻原さんの顔が赤く

「小林くん」

その時、教室の扉の方から声が掛かった。

見ればクラスメイトの女子達で、「おはよう」と手を振りながら、こちらに近付いて来る。

「昨日は折り畳み傘ありがとね。小林くんのおかげで助かったかな」

「あはは、困った時はお互い様だから。たまたま折り畳み傘が余分にあっただけだよ」

「小林くんって本当にマメだねー。今度私も貸して貰っちゃおうかな」

「あ、本当に？」

それは何とも嬉しい申し出だ。

「こっば〜や〜し〜！」

「へっ？」

振り返ると。

今度こそ気のせいでも何でもなく顔を赤くした荻原さんがいて。

ああ、何て言うか、熟したリンゴみた

「バカアアア ツ！！！！」

「何故にツ！？」

思いっきり殴られた。

うつ伏せに倒れて気付いたことだけでも、教室の床って意外に温かいんだね。ぬふーん。

荻原さんは「死ね！」と大声で怒鳴り、教室を出て行ってしまった。

女子達は「小林くんも大変ね」「頑張ってるね」と不可解なエールを送ってくれた。何のこっちゃ。

「おっす小林、昨日は傘助かったぜ！……って、何やってんだ、お前？」

かろうじて顔を上げれば、そこにいたのはこれまた折り畳み傘をあげたクラスメイトの男子。

俺は再びうつ伏せになる。

もう駄目。腹筋が疲れた。

「……学校に何十本も貯めてたツケが回って来たらしい……」

置き傘を『持って来るの』を忘れたことは、一度もない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3060i/>

Bringer

2010年10月8日15時29分発行